

## 関門海峡の観光に関する域外住民の意識の推移

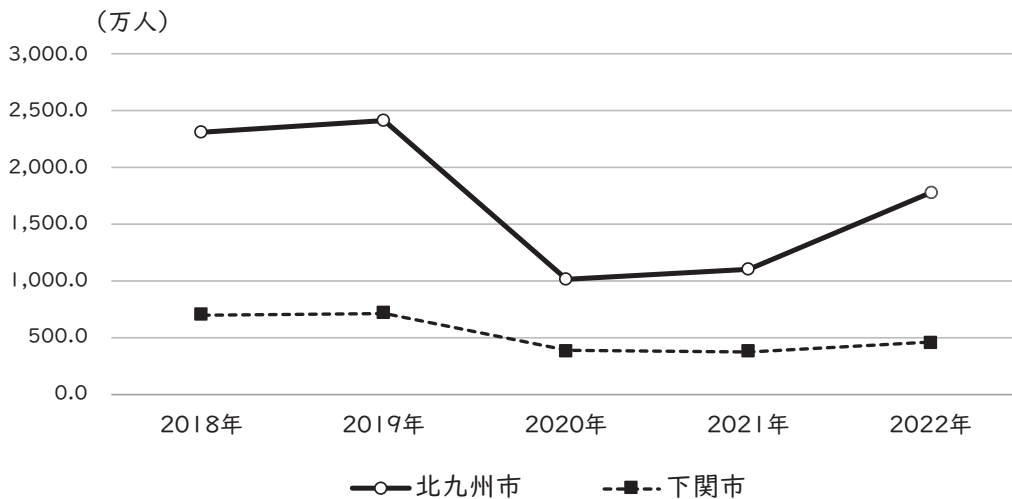
## 関門海峡の観光に関する域外住民の意識の推移

北九州市立大学地域戦略研究所 南 博

### 1. はじめに

#### (1) 調査研究の背景

2020年以降のいわゆる“コロナ禍”により観光関連産業は極めて大きな影響を受け、地域経済にも大きな負の影響があった。関門地域においても新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が出された2020年においては北九州市、下関市ともに大きく観光客数が減少し、同じく緊急事態宣言が出された期間を含む2021年においては横ばい状態となり、影響が薄れてきた2022年以降は増加傾向になってきている（図1）。また、訪日外国人旅行者客（インバウンド）も大きく減少した。なお2023年においては、本稿執筆時点では確定的な数値は明らかとなっていないが、観光客数は大幅に増加し、回復基調となっている。



(出典) 北九州市 (2023) 「北九州市観光動態調査 (令和4年次)」、下関市 (2023) 「令和4年の下関市観光客数・宿泊客数について」をもとに筆者作成

図1 コロナ禍前後の関門地域（北九州市、下関市）の観光客数の推移

コロナ禍は、観光客数の減少とともに、人々のライフスタイルや意識の変化ももたらした。観光面においては、居住地から身近な場所で観光する「マイクロツーリズム」の考え方の普及や、オンライン会議の普及によるビジネス客の出張の減少（出張ついで観光の減少につながる）等が挙げられよう。しかしながら、2023年5月に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症に移行して以降、急速に2019年以前の“日常”が戻る中で、観光客の動態や、観光に対する人々の意識も大きく変化していることが考えられる。

一方、コロナ禍の影響を受けている間においても、関門地域においては様々な観光政策

の検討が進められ、民間等による様々な観光関連事業の取組も見られた（表1）。これらの今後の展開により、関門地域の観光関連事業の振興や地域活性化に様々な変化が生じることも考えられる。

表1 コロナ禍の期間中における関門地域での観光関連の主な動向（例）

取組主体	動向（例）
行政	北九州市： 北九州市観光振興プラン 改訂（2023年4月） ※その他、2023年度には市全体の新たなビジョンの策定とも関連した様々な検討が実施されている。 下関市： 下関市観光施設事業経営戦略 策定（2021年2月） 火の山地区観光施設再編整備基本計画 策定（2023年2月） あるかぼーと・唐戸エリアマスタープラン 策定（2023年2月）
民間等	・「日本遺産フェスティバル in 関門」開催（2022年10月、関門海峡日本遺産協議会など） ・「関門海峡 光の架け橋メガトリップエリア構築事業」（2022年度、官民連携による取組） ※関門海峡メガジップライン構想含む など

（出典）筆者作成

## （2）研究の目的

上述のように関門地域の観光を巡り近年様々な変化、特にコロナ禍に伴う外部要因による大きな変化があった。関門地域における観光政策を検討していくに際しては、コロナ禍による影響や人々の観光に関する指向動向を把握することに一定の意義があり、その結果をもとに今後の展開等を具体的に考察していくことが求められよう。

関門地域共同研究において2015年度に取り組んだ南博（2016）「関門地域の観光の現状と課題－地域外住民からの意識等に注目して－」『関門地域研究』Vol.25においては、国内6都市（仙台市、横浜市、名古屋市、大阪市、広島市、熊本市）の市民の関門地域に対するイメージや観光行動の実態等をアンケート調査により把握している（調査実施期間：2016年1月20日～1月25日）。そこで得られた結果と、コロナ禍を経た2023年度における他都市居住の市民意識を比較することにより、8年間の関門地域に対する他都市住民の意識の変化の一端を把握でき、近年の観光関連（国内観光分野）の取組の成果の把握や、今後の観光政策の検討に寄与するのではないかと。

こうしたことから、本研究においては国内他都市の一般市民の関門地域の観光に対する認識等を把握するとともに、その結果を約8年前の調査と比較することにより、関門地域における観光政策を評価・検討するに際しての基礎資料を得ることを目的とする。

なお、関門地域の観光政策および地域活性化においてもインバウンドの誘客が一層重要な課題となっており、また、域内におけるマイクロツーリズムの重要性も増してきているが、本研究においては国内他都市からの観光に特に着目することとする。

### (3) 研究方法

南（2016）との比較の観点から、南（2016）と同様にインターネット調査（民間調査会社のモニター登録者対象）を行い、その結果を考察する。調査項目に関しては、南（2016）と整合させる一方、時間の経過を踏まえた修正や、関連設問の追加等を行う。

## 2. アンケート調査の実施概要

### (1) 調査手法および調査対象

国内他都市の住民の意識を広く把握する手法としては、インターネット調査が最も妥当なものと考えられる。なお、南（2016）においても、「学術研究におけるインターネット調査の有意性を巡っては様々な議論があり、「登録されたモニターの回答は、調査対象とすべき母集団（本研究の場合、一般的な国民）の意見を代表していると証明できない」、「回答者に偏りが生じやすい（高齢者が少ない等）」などの指摘が行われている。しかしながら他に代替可能な手法がないため、本研究ではインターネット調査を用いる」としている。

なお、インターネット調査という同一手法によって得られた結果を経年比較することには大きな意義があると考えられ、調査対象、調査項目については、南（2016）を踏襲することを基本とする。

調査対象としては、南（2016）と同様、「北海道・東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、中四国地方、九州地方に位置する政令指定都市の中から、それぞれ仙台市、横浜市、名古屋市、大阪市、広島市、熊本市の6市の住民を対象」とし、年齢は「20歳以上」とする。

なお、調査の配布・回収に際しては民間インターネット調査会社の提供サービスを利用することとなるが、委託先となる民間インターネット調査会社については南（2016）と異なる会社が選定される場合がある。調査会社によって、各社が管理する調査モニターへ登録している市民の属性等に若干の相違があることも否定できないが、本研究においてはこの点は考慮しないこととする。

サンプル数については、南（2016）においては6都市から各300サンプル程度の回収としたが、本研究においては各200サンプル程度の回収とする。

### (2) 調査項目

南（2016）との比較に観点から、基本的に同一の調査項目とし、一部の設問について調査時点の変化等を勘案し、削除、追加を行うこととした。調査項目一覧を表2に示す。なお、表中の「2016調査」は、南（2016）において2016年1月20日～1月25日に実施したアンケート調査を指す。また、「2024調査」は、本研究によるアンケート調査を指す。

Q10、11、16の3問は本研究において新たに設けた問となる。また、2016調査における設問のうち計5問については比較の必要性がないこと等から削除した。

表2 アンケート調査の調査項目一覧

分類	番号	設問	備考
関門地域の 認知度	Q1-1	日本国内に「関門（かんもん）地域」と呼ばれる地域があることをご存じですか？ 【2016 調査と同様】	この段階では、回答者に関門地域がどの地域を指すのか回答者に明示せず。
	Q1-2	「関門地域」に当てはまる地域はどこだと考えますか。県や市町村などの名称を用いながらご記入ください。（明確な正解のある質問ではありません。お考えになるままお答えください。）【2016 調査と同様】	自由記入式
	Q2	あなたは、山口県下関市をご存じですか。 【2016 調査と同様】	
	Q3	あなたは、福岡県北九州市をご存じですか。 【2016 調査と同様】	
この段階で「関門地域」を下関市、北九州市と定義することを回答者全体に明示			
関門地域への 訪問および 観光行動の 実態	Q4	※Q2、Q3で「下関市または北九州市に行ったことがある」回答者を対象 関門地域（下関市、北九州市）を訪れた際、以下のような観光を行ったかどうかお答えください。 【2016 調査から設問表現、一部選択肢を変更】	2016 調査ではこの設問の前に訪問回数の設問があったが、2024 調査では削除
	Q5	※Q2、Q3で「下関市または北九州市に行ったことがある」回答者を対象 関門地域内で宿泊した経験がありますか。 【2016 調査と同様】	
	Q6	※Q2、Q3で「下関市または北九州市に行ったことがある」回答者を対象 一度の観光や出張において、下関市と北九州市の双方に行ったことはありますか。【2016 調査と同様】	
	Q7	※Q2、Q3で「下関市または北九州市に行ったことがある」回答者を対象 関門地域に行った時に、併せて訪れたことのある周辺都市・観光地をすべて選んでください。 【2016 調査と同様】	2016 調査ではこの設問の前に利用交通手段の設問があったが、2024 調査では削除
	Q8	※Q2、Q3で「下関市または北九州市に行ったことがある」「住んでいたことがある」回答者を対象 関門地域の観光資源で、行ったことがある場所をすべて選んでください。 【2016 調査と同様。ただし一部選択肢の表現を修正】	2016 年以降にオープン、閉鎖した施設等の選択肢について、表現の微修正を実施。

分類	番号	設問	備考
関門地域への観光等による訪問の意向等	Q9	関門地域の観光資源で、今後行ってみたい場所をすべて選んでください。 【2016 調査と同様。ただし一部選択肢の表現を修正】	同上
	Q10	地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定する「日本遺産」の制度をご存知ですか。 【新設】	新規の設問
	Q11	下関市と北九州市にある 42 の文化財で構成される「関門“ノスタルジック”海峡 ～時の停車場、近代化の記憶」というストーリーが、2017 年に日本遺産に認定されました。そのことをご存知ですか。【新設】	新規の設問
	Q12	今後、関門地域（下関市、北九州市）に観光で行ってみたいと思いますか。 【2016 調査と同様】	
	Q13	※Q12 で「あまり行ってみようとは思わない」および「行ってみようとは思わない」回答者を対象 関門地域に観光で行ってみたいと思わない理由は何ですか。主な意見を 2 つまで回答してください。 【2016 調査と同様】	
	Q14	北九州市の中心部と下関市の中心部の間は、関門海峡を挟んでいますが、非常に近い距離にあります。※電車で約 15 分（小倉駅～下関駅）、船（門司港～唐戸）で約 5 分、徒歩（関門人道トンネル）で約 15 分。仮に北九州市に観光や仕事で行った際、下関市までついでに行ってみようと思いませんか。あるいは下関市に行った場合、北九州市までついでに行ってみようと思いませんか。 【2016 調査と同様】	2016 調査ではこの設問の後に、関門両市への訪問条件の設問、スポーツツーリズム関連の 2 設問があったが、2024 調査では削除
関門地域に対するイメージ	Q15	それぞれの言葉（形容詞）について、関門地域のイメージに当てはまるものをお答えください。 ① 新しい / 古い ② にぎやかな / 寂しい ③ 明るい / 暗い ④ 快適な / 不快な ⑤ 親しみのある / よそよそしい ⑥ 安全な / 危険な ⑦ 美しい / 美しくない ⑧ 変化に富んだ / 単調な ⑨ 特色豊かな / ありきたりな ⑩ 便利な / 不便な ⑪ おもしろい / つまらない ⑫ 住みやすい / 住みにくい ⑬ 開放的な / 閉鎖的な ⑭ 発展的な / 衰退的な ⑮ さわやかな / さわやかではない 【2016 調査と同様】	対になる各形容詞群について、5 段階の尺度から近いイメージを選択
北九州市の観光資源整備の方向性	Q16	最後に、北九州市について質問します。北九州市の観光資源の整備について、今後、何を充実させていくべきだと思いますか。北九州市のことをよくご存じない方は、イメージでお答えください。 【新設】	新規の設問
属性	—	性別、年齢、居住市	

### (3) 調査実施概要

本研究におけるアンケート調査の実施概要を表3に示す。2016調査との相違等についても併せて示す。

表3 アンケート調査の実施概要

調査名	観光に関するアンケート 【2016調査と同様】 ※認知度把握の設問があるため、タイトルからは敢えて「関門地域」を外して実施
調査手法	インターネット調査 【2016調査と同様】 ただし、調査モニターに関しては2016調査はマイボイスコム(株)が管理・利用する調査モニター、2024調査は(株)インテージの調査モニターである。 双方の調査モニターに大きな差はないものとみなす。
調査対象	仙台市、横浜市、名古屋市、大阪市、広島市、熊本市の20歳以上の市民のうち、民間インターネット調査会社が管理・利用する調査モニターへ登録している市民 【2016調査と同様。ただし回収サンプル数は2016調査が1都市300サンプル程度であったことに対し、2024調査は1都市200サンプル程度とした】
実施期間	2024年2月8日～2月13日 ※参考： 2016調査： 2016年1月20日～1月25日
有効回答数	1,249サンプル(6市合計) 仙台市206サンプル、横浜市204サンプル、名古屋市207サンプル、大阪市212サンプル、広島市210サンプル、熊本市210サンプル ※参考： 2016調査 1,916サンプル(6市合計)

### (4) 回答者の基本属性

回答者の基本属性について、性別を図2、年齢を図3に示す。

性別については都市間で若干のバラツキはみられるが、極端な違いはない。2016調査と比較し男性がやや多くなっているが、概ね同様の傾向にある。

年齢に関しては、都市間での差は小さい一方、2016調査と比較すると、20代、30代の比率が低く、60代、70代以上の比率が高くなっている。40代・50代の回答者が中心となっている点に変化していないが、留意が必要である。なお、年齢は数値入力で回答されており、単純平均値を算出すると2016調査は49.4歳、2024調査は55.0歳となる。

次章でのアンケート調査結果の考察においては、南(2016)と同様、2024調査の回答者合計および居住市別の集計を基本的に用いて考察するとともに、回答者合計値について2016調査との比較を行う。また、設問内容によっては他の属性によるクロス集計を用いて考察していく。

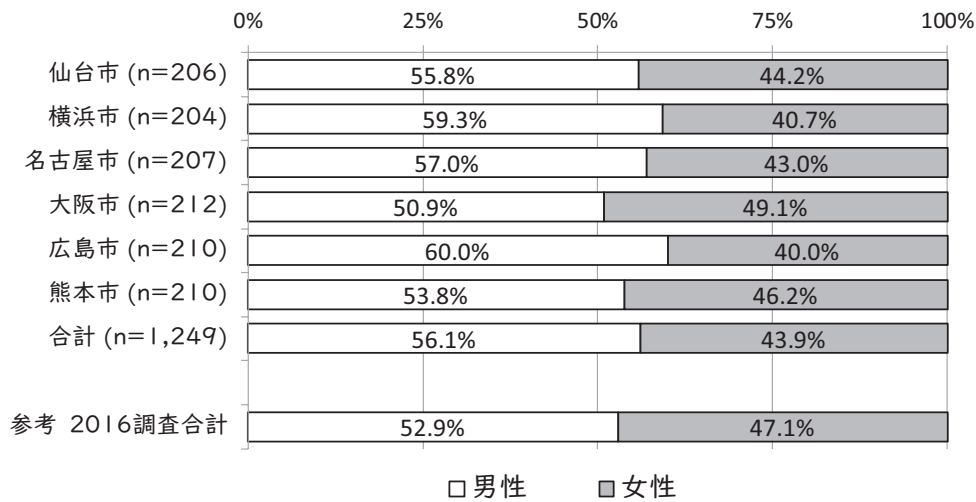


図2 回答者の性別

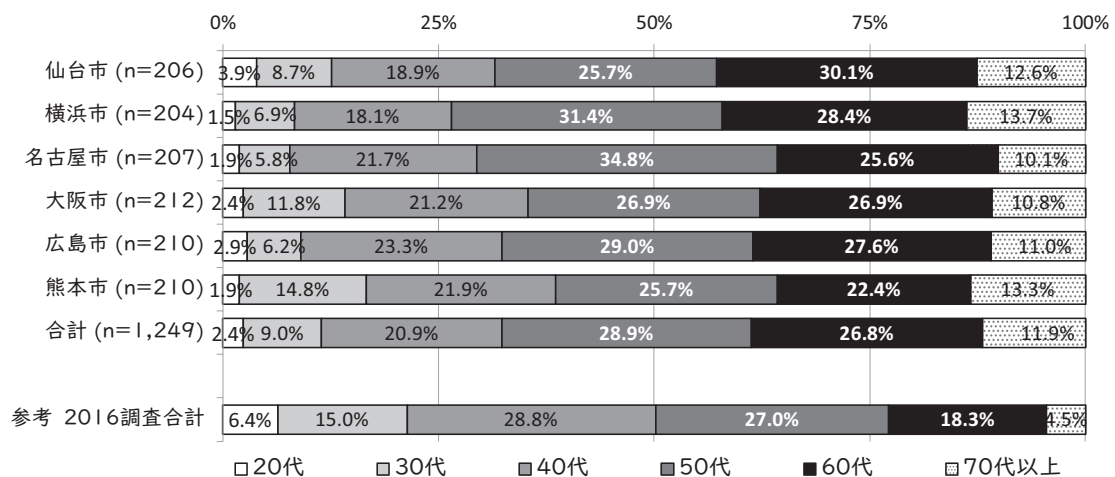


図3 回答者の年齢

### 3. 関門地域の観光に関する域外住民の意識、行動のアンケート調査結果

#### (1) 関門地域の認知度

##### ① 「関門地域」と呼ばれる地域の存在の認知状況

2016 調査と同様の設問として、「日本国内に『関門（かんもん）地域』と呼ばれる地域があることをご存じですか？」と尋ねた結果を図4に示す。この設問では、関門地域の定義や場所について、回答者には示さない形で質問している。

2024 調査において、関門地域を「知っている」とする回答者は 35.3% となっている。過半数が「知らない」という状況であり、関門地域の知名度は高いとは言えない。居住市による認知状況のばらつきは大きく、広島市では 53.8% が「知っている」と回答しているが、仙台市では 24.8% にとどまり、また三大都市圏の横浜市、名古屋市、大阪市において



は30%台前半の市民しか認知していない状況にある。性別で見ると女性の認知度が低く、年齢別にみると若い世代ほど認知度が低くなっている。なお、属性別の傾向は2016調査と概ね同様である。

合計値について2024調査と2016調査を比較すると、2016調査では43.5%であった認知度が、2024調査では35.3%に減少している。その要因については本アンケート調査では明らかとならないが、近年、「関門地域」という呼称の認知度が高まるような特別な出来事が無く、コロナ禍における社会の混乱や、日常生活に溢れる情報のなかで、地域名称の印象が薄まった可能性が考えられる。今後の情報発信の重要性が指摘できよう。

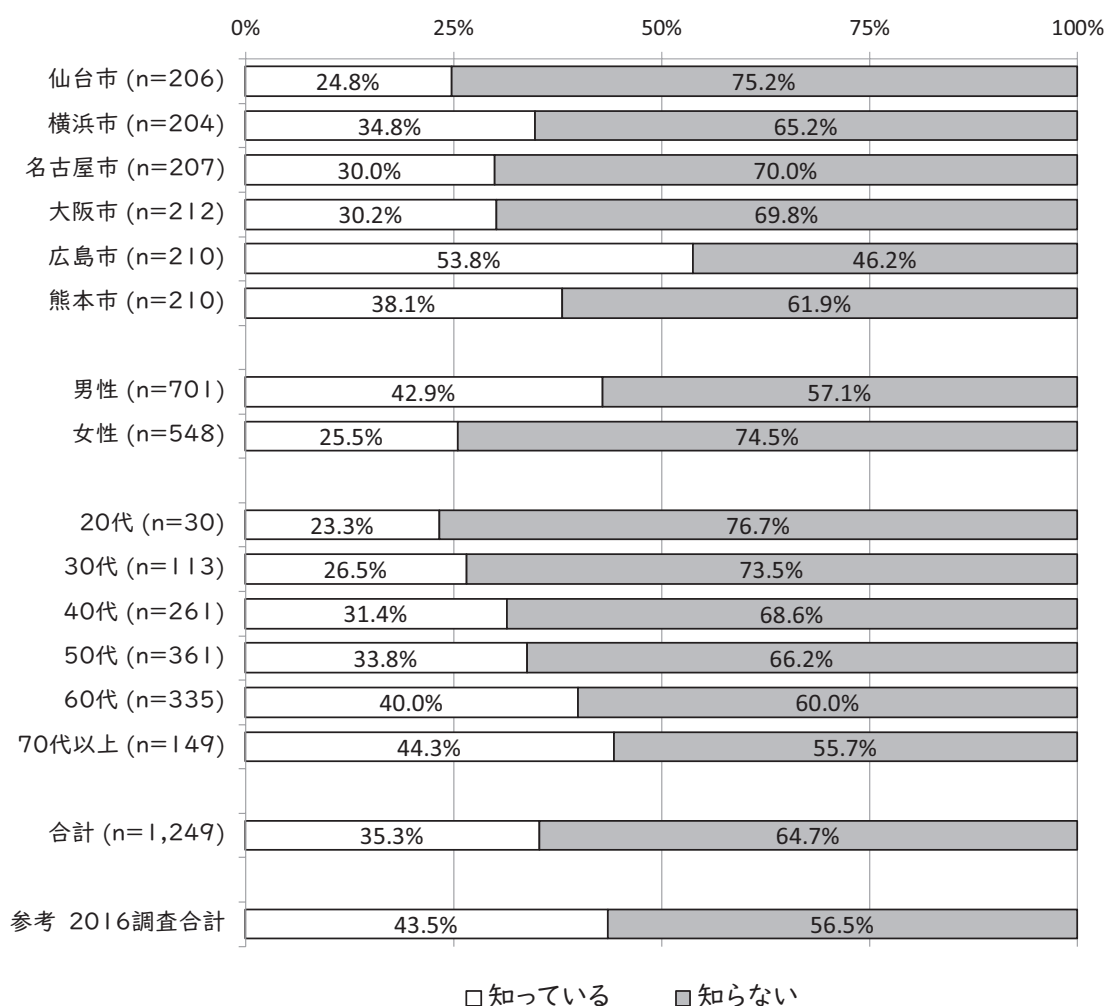


図4 「関門地域」と呼ばれる地域の存在の認知状況

## ② 「関門地域」に当てはまる地域に関する認識

2016 調査と同様の設問として、『「関門地域」に当てはまる地域はどこだと考えますか。県や市町村などの名称を用いながらご記入ください。(明確な正解のある質問ではありません。お考えになるままお答えください。)] という問に対する自由記入回答を集計した結果を表 4 に示す。

最も多いのは「下関」のみの記述が行われている回答であり、それとほぼ同数で「下関 & 門司」とした記述であった。「下関 & 北九州」とする回答はその半分程度となっている。関門地域という名称からは、下関市が強くイメージされていると言えよう。また、北九州市域については、「門司」という記述が「北九州」という記述より大幅に多い。なお、全く異なる地域をイメージする回答者は少数にとどまる。これらの傾向は 2016 調査と同様である。

2024 調査によると、関門地域を認識しており、そのエリアが北九州市（門司区に限定する場合も含む）と下関市であることをイメージできる他都市住民は 20 ～ 30% 程度であることを、関門地域の観光振興に取り組むうえでは認識しておく必要があると言えよう。

表 4 「関門地域」に当てはまる地域に関する認識（6 市合計）

記述内容	回答者数 (人)	全回答者に 占める比率	2016調査
「下関」 & 「門司 (門司市を含む)」	111	8.9%	13.6%
「下関」	114	9.1%	7.8%
「下関」 & 「北九州」	59	4.7%	5.9%
「山口県」 & 「福岡県」	19	1.5%	3.8%
「関門海峡」	21	1.7%	3.2%
「山口県」	40	3.2%	2.7%
「北九州」	21	1.7%	0.9%
「門司 (門司市を含む)」	9	0.7%	0.7%
「山口市」 関連記述	6	0.5%	0.5%
「九州」	2	0.2%	0.4%
「本州と九州の間」	3	0.2%	0.3%
「山口県」 & 「北九州市」	2	0.2%	0.3%
下関市、山陽小野田市、北九州市、苅田町	1	0.1%	0.0%
「下関」 & 「九州」 「福岡」	2	0.2%	0.3%
「下関」 & 「小倉 (小倉市を含む)」	4	0.3%	0.3%
「福岡」	3	0.2%	0.1%
国内の他地域	24	1.9%	2.5%
※「関門地域」という地域の存在を知らない	808	64.7%	56.5%
(参考) 「門司市」との記述	28	2.2%	2.6%

### ③ 「山口県下関市」および「福岡県北九州市」の認知・訪問状況

2016 調査と同様の設問として、「あなたは、山口県下関市をご存じですか。」および「あなたは、福岡県北九州市をご存じですか。」という設問に対する回答結果をまとめたものを表 5、表 6 に示す。下関市に「住んでいたことがある」「行ったことがある」人は 40% 強、

表 5 「山口県下関市」の認知・訪問状況

	住んでいたことがある	行ったことがある	名前も場所も知っているが、行ったことはない	名前は知っているが、場所は知らないし行ったことはない	知らない	合計
仙台市 (n=206)	1.0%	13.1%	53.4%	21.8%	10.7%	100.0%
横浜市 (n=204)	0.5%	27.9%	47.1%	17.2%	7.4%	100.0%
名古屋市 (n=207)	1.4%	22.2%	52.7%	15.0%	8.7%	100.0%
大阪市 (n=212)	1.4%	33.5%	43.9%	14.6%	6.6%	100.0%
広島市 (n=210)	4.3%	81.0%	11.9%	2.4%	0.5%	100.0%
熊本市 (n=210)	2.9%	65.2%	20.0%	5.2%	6.7%	100.0%
男性 (n=701)	2.0%	44.2%	38.4%	10.4%	5.0%	100.0%
女性 (n=548)	1.8%	36.1%	37.6%	15.5%	8.9%	100.0%
20代 (n=30)	0.0%	33.3%	26.7%	16.7%	23.3%	100.0%
30代 (n=113)	1.8%	32.7%	31.9%	17.7%	15.9%	100.0%
40代 (n=261)	3.1%	39.8%	34.9%	17.2%	5.0%	100.0%
50代 (n=361)	1.7%	34.3%	44.0%	13.0%	6.9%	100.0%
60代 (n=335)	1.2%	48.1%	37.9%	9.3%	3.6%	100.0%
70代以上 (n=149)	2.7%	48.3%	36.2%	6.7%	6.0%	100.0%
合計 (n=1,249)	1.9%	40.7%	38.0%	12.7%	6.7%	100.0%
参考 2016調査合計	0.9%	42.6%	40.2%	13.2%	3.1%	100.0%

※最も多い回答に網掛

表 6 「福岡県北九州市」の認知・訪問状況

	住んでいたことがある	行ったことがある	名前も場所も知っているが、行ったことはない	名前は知っているが、場所は知らないし行ったことはない	知らない	合計
仙台市 (n=206)	1.5%	22.3%	52.9%	16.5%	6.8%	100.0%
横浜市 (n=204)	2.0%	31.4%	42.6%	17.6%	6.4%	100.0%
名古屋市 (n=207)	3.9%	32.9%	41.1%	17.4%	4.8%	100.0%
大阪市 (n=212)	0.9%	48.1%	35.8%	11.8%	3.3%	100.0%
広島市 (n=210)	3.3%	79.5%	13.8%	2.4%	1.0%	100.0%
熊本市 (n=210)	6.7%	76.2%	12.4%	1.0%	3.8%	100.0%
男性 (n=701)	3.7%	52.1%	32.1%	8.8%	3.3%	100.0%
女性 (n=548)	2.2%	44.2%	34.1%	13.9%	5.7%	100.0%
20代 (n=30)	3.3%	46.7%	26.7%	13.3%	10.0%	100.0%
30代 (n=113)	0.9%	38.9%	32.7%	18.6%	8.8%	100.0%
40代 (n=261)	1.9%	49.0%	31.4%	14.2%	3.4%	100.0%
50代 (n=361)	3.9%	41.8%	37.7%	11.1%	5.5%	100.0%
60代 (n=335)	3.6%	55.5%	30.7%	7.5%	2.7%	100.0%
70代以上 (n=149)	3.4%	56.4%	30.9%	7.4%	2.0%	100.0%
合計 (n=1,249)	3.0%	48.6%	33.0%	11.0%	4.3%	100.0%
参考 2016調査合計	2.1%	46.5%	35.1%	13.4%	2.9%	100.0%

※最も多い回答に網掛

北九州市に「住んでいたことがある」「行ったことがある」人は50%強となっており、多くの人が訪問経験があると言える。また、「知らない」とする回答は下関市6.7%、北九州市4.3%であり、両市の名称はほとんどの域外住民に認知されている。両市とも2016調査と概ね同様の傾向となっている。両市が高い認知度を有することは関門地域の観光振興を進めるうえで強みと言えよう。一方、若い世代からの認知度が比較的低い点は課題である。

## (2) 関門地域への訪問および観光行動の実態

(1) ③において、下関市または北九州市へ「行ったことがある」とした回答者を対象とし、他都市から関門地域へ観光等で訪問した際の行動の実態を質問する。なお、アンケート調査においては、本節以降の設問に進む前に「関門地域」を下関市、北九州市と定義することを回答者全体に回答画面上で明示した。これは2016調査と同様である。

### ① 「関門地域」を訪れた際の観光行動

下関市または北九州市へ「行ったことがある」回答者(n=690)に対し、「関門地域(下関市、北九州市)を訪れた際、以下のような観光を行ったかどうかお答えください(複数回答可)」として尋ねた結果を図5に示す。なお、本設問については2016調査において類似の設問はあるが、観光目的で関門地域に来たことがある回答者に絞って回答を求めていることから、本研究(2024調査)と回答者の条件が異なるため比較は行わない。

最も多い行動は「観光施設めぐり」の46.1%、次いで「ドライブ」38.7%、「グルメ」31.2%、「歴史・文化探訪、文化財観光」21.7%となっている。これらが関門地域での観光行動の主たる要素と言えよう。「観光はしていない」は14.1%であり、域外住民が関門地域を訪れた場合、何らかの観光行動がとられたケースが多いと言えよう。

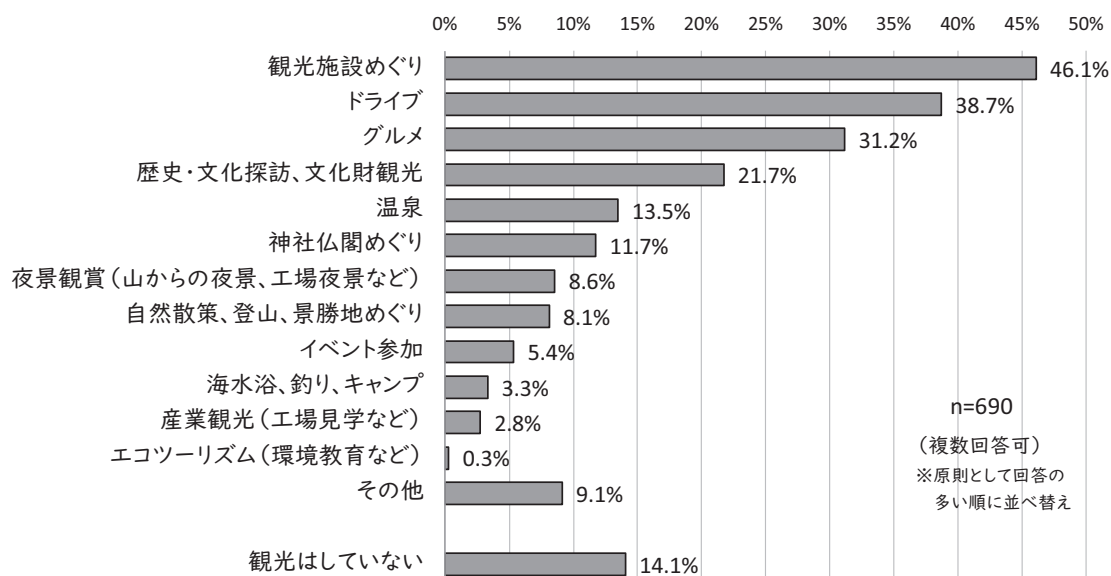


図5 「関門地域」を訪れた際の観光行動(関門地域を訪れたことのある人のみ対象)

この結果について年齢別にまとめたものを表7に示す。各世代とも「観光施設めぐり」が最も多い。2番目に多い行動は、20代・30代では「グルメ」、70代以上では「歴史・文化探訪、文化財観光」、40～60代では「ドライブ」となっており、年齢別の特徴がみられる。

表7 「関門地域」を訪れた際の観光行動（年齢別）

選択肢（複数回答可）	20代・30代 (n=67)	40代 (n=145)	50代 (n=176)	60代 (n=207)	70代以上 (n=95)	合計 (n=690)
温泉	13.4%	13.8%	11.9%	13.5%	15.8%	13.5%
ドライブ	37.3%	42.8%	39.8%	38.2%	32.6%	38.7%
海水浴、釣り、キャンプ	4.5%	4.8%	3.4%	1.4%	4.2%	3.3%
神社仏閣めぐり	9.0%	7.6%	11.9%	12.1%	18.9%	11.7%
歴史・文化探訪、文化財観光	14.9%	16.6%	22.7%	21.3%	33.7%	21.7%
観光施設めぐり	44.8%	46.2%	44.3%	47.3%	47.4%	46.1%
自然散策、登山、景勝地めぐり	7.5%	6.9%	7.4%	8.2%	11.6%	8.1%
夜景観賞（山からの夜景、工場夜景など）	14.9%	5.5%	11.9%	4.8%	10.5%	8.6%
産業観光（工場見学など）	3.0%	2.8%	1.7%	2.4%	5.3%	2.8%
エコツーリズム（環境教育など）	1.5%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%
イベント参加	7.5%	6.2%	6.3%	5.3%	1.1%	5.4%
グルメ	41.8%	37.9%	33.0%	25.6%	22.1%	31.2%
その他	6.0%	11.7%	10.2%	9.7%	4.2%	9.1%
観光はしていない	6.0%	11.0%	19.9%	13.5%	14.7%	14.1%

※年齢別に上位2項目に網掛 ※20代は回答対象サンプルが少ないため、30代と合算

## ② 「関門地域」での宿泊経験

下関市または北九州市へ「行ったことがある」回答者（n=690）に対し、「関門地域内で宿泊した経験がありますか。」と尋ねた結果を図6に示す。関門地域を訪れたことのある人（観光目的以外も含む。）の約半数が「宿泊したことがある」と回答しており、2016調査と概ね同様の結果となっている。

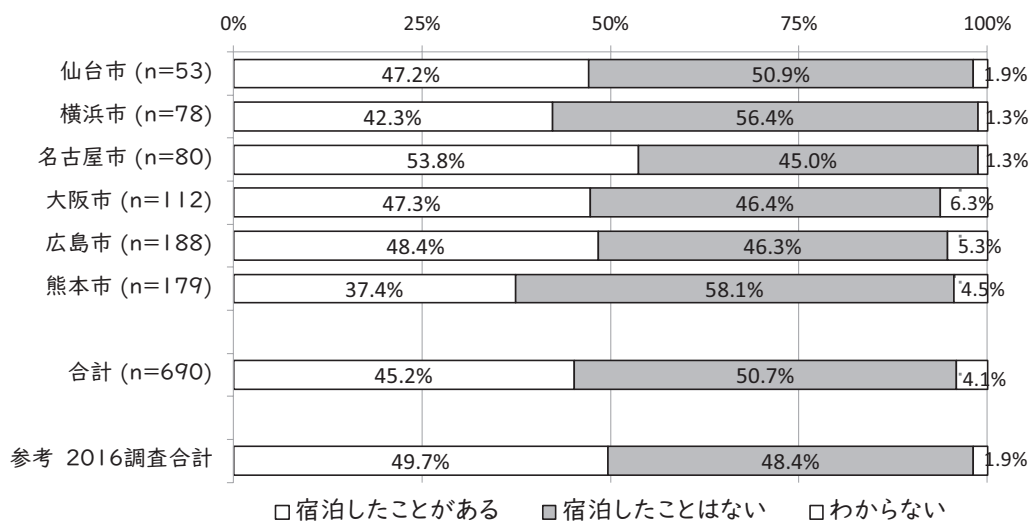


図6 「関門地域」での宿泊経験（関門地域を訪れたことのある人のみ対象）

### ③ 一度の観光・出張において下関市と北九州市の双方を訪問したことの有無

下関市または北九州市へ「行ったことがある」回答者（n=690）に対し、「一度の観光や出張において、下関市と北九州市の双方に行ったことはありますか。」と尋ねた結果を図7に示す。

回答者合計では、関門地域を訪れたことのある人（観光目的以外も含む。）の約半数が一度の観光や出張において、下関市と北九州市の双方に行ったことがあると回答しており、両市の一体性の高さが確認できるとともに、両市が観光政策において連携することの重要性が示唆される。2016調査とほぼ同じ結果となっている。

都市別にみると、広島市居住者は一度に双方を訪問した回答者の比率が高いことが特徴的であり、関門地域に地理的に近い都市においては双方を訪問した経験がある人が多い傾向がうかがわれる。

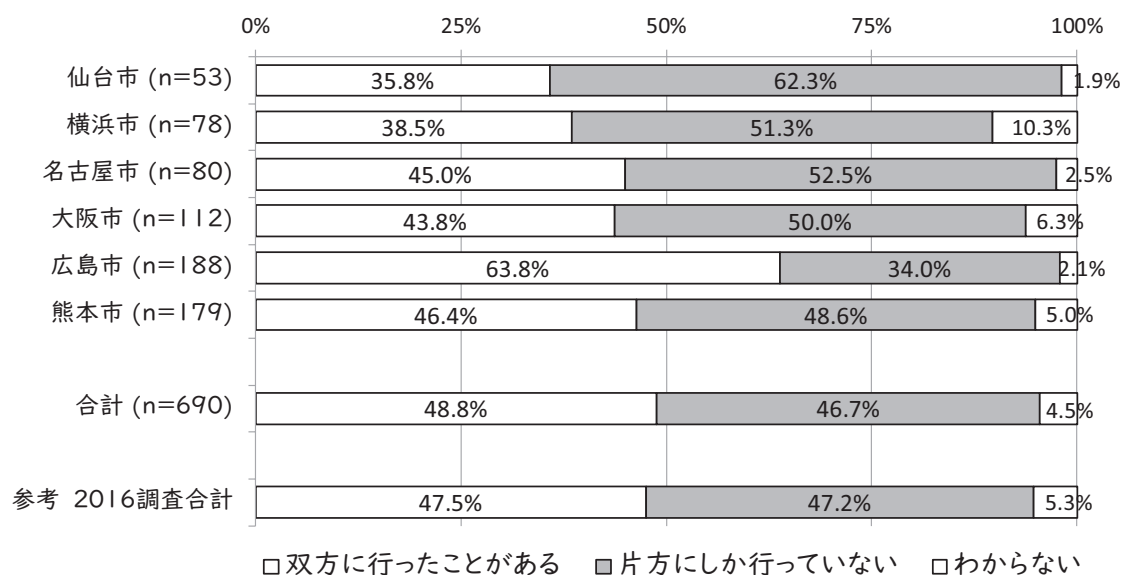


図7 一度の観光・出張において下関市と北九州市の双方を訪問したことの有無（関門地域を訪れたことのある人のみ対象）

### ④ 「関門地域」への訪問に際し併せて訪れた周辺都市・観光地

下関市または北九州市へ「行ったことがある」回答者（n=690）に対し、「関門地域に行った時に、併せて訪れたことのある周辺都市・観光地をすべて選んでください。」と尋ねた結果について、回答者全体の結果を2016調査と比較したものを図8に示す。

最も多いのは「福岡市(博多など)・糸島」であり、45.2%が回答している。次いで、30%前後の同程度の比率で、「秋芳洞および周辺」、「萩・長門」、「太宰府天満宮、九州国立博物館周辺」が並び、次いで「別府・湯布院・大分市」が24.6%となっている。関門地域と併せて福岡市周辺、山口県内、大分県内に幅広く同時訪問する場所が広がっており、関門地域

が交通結節点であることと関係性があるものと思われる。「併せて訪れた都市・観光地はない」とする回答者は19.9%で比較的少ない。2016調査と概ね同傾向にあるが、「広島市・宮島」と「福岡市(博多など)・糸島」、「太宰府天満宮、九州国立博物館周辺」において増加が目立つ。北九州市周辺の政令指定都市圏域とセットでの訪問が増加傾向にあると言えよう。

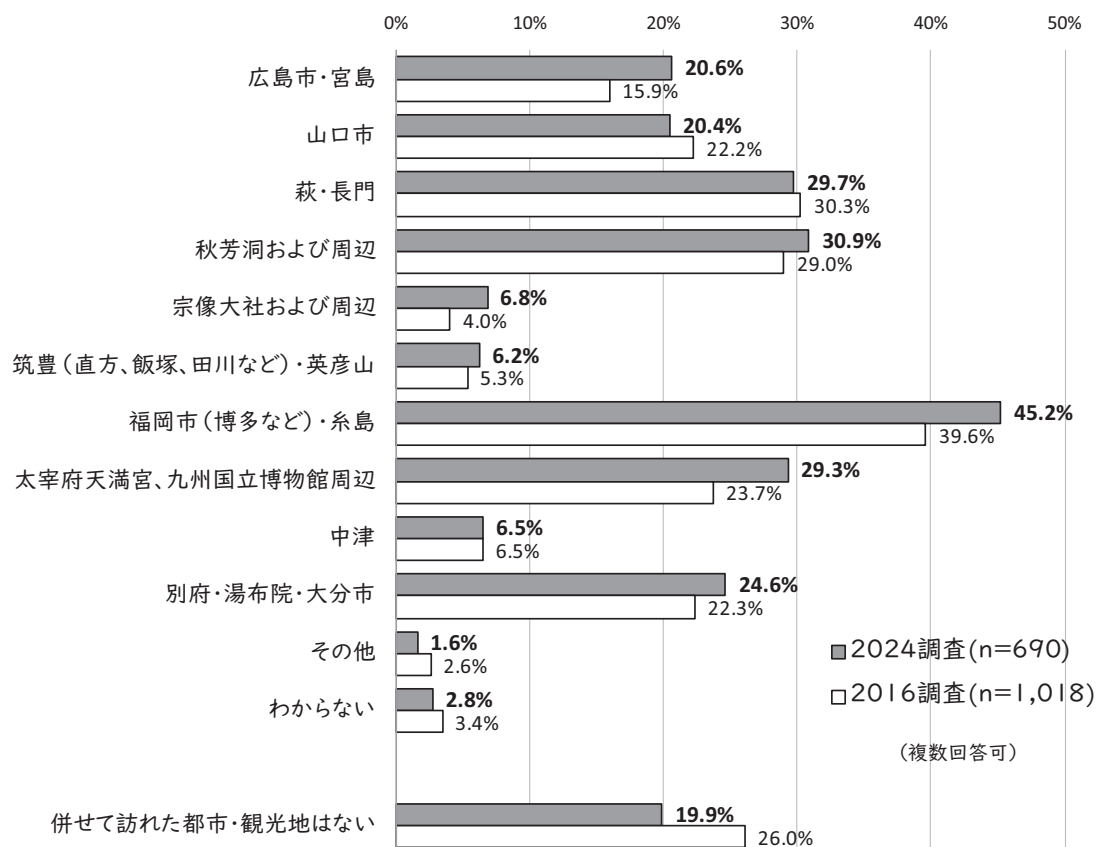


図8 「関門地域」への訪問に際し併せて訪れた周辺都市・観光地(関門地域を訪れたことのある人のみ対象)

表8 「関門地域」への訪問に際し併せて訪れた周辺都市・観光地(居住市別)

選択肢(複数回答可)	仙台市 (n=53)	横浜市 (n=78)	名古屋市 (n=80)	大阪市 (n=112)	広島市 (n=188)	熊本市 (n=179)	合計 (n=690)
広島市・宮島	28.3%	26.9%	20.0%	29.5%	9.0%	22.3%	20.6%
山口市	17.0%	24.4%	18.8%	20.5%	21.3%	19.6%	20.4%
萩・長門	22.6%	28.2%	26.3%	32.1%	29.3%	33.0%	29.7%
秋芳洞および周辺	20.8%	26.9%	28.8%	32.1%	31.4%	35.2%	30.9%
宗像大社および周辺	3.8%	9.0%	2.5%	3.6%	4.8%	12.8%	6.8%
筑豊(直方、飯塚、田川など)・英彦山	3.8%	6.4%	7.5%	3.6%	2.1%	12.3%	6.2%
福岡市(博多など)・糸島	54.7%	47.4%	46.3%	54.5%	34.0%	46.9%	45.2%
太宰府天満宮、九州国立博物館周辺	24.5%	23.1%	41.3%	29.5%	24.5%	33.0%	29.3%
中津	5.7%	10.3%	6.3%	4.5%	4.3%	8.9%	6.5%
別府・湯布院・大分市	28.3%	25.6%	30.0%	32.1%	18.1%	22.9%	24.6%
その他	1.9%	3.8%	1.3%	0.9%	2.1%	0.6%	1.6%
わからない	3.8%	1.3%	3.8%	0.9%	1.6%	5.0%	2.8%
併せて訪れた都市・観光地はない	7.5%	16.7%	15.0%	8.9%	30.3%	22.9%	19.9%

※居住市別に上位3項目に網掛

この結果について居住している市別にみた結果を表 8 に示す。6 市とも「福岡市(博多など)・糸島」が最も多くなっており、2 番目以降は広島方面、山口方面、大分方面などに分散している。広島市居住者については、「併せて訪れた都市・観光地はない」とする回答が比較的多くなっている。

関門地域を唯一の目的地として訪問する観光客を増やすことも極めて重要ではあるが、南(2016)でも指摘しているように、関門地域における観光政策を進めるに際しては、関門地域内のみではなく、広島・山口～福岡市周辺～大分方面との広域的な周遊を視野に入れ、広域連携を進めることが必要と言えよう。それにより、域外観光地を訪れる観光客の中で関門地域を訪れていない人々を関門地域に呼び込むことにもつながると考えられる。

#### ⑤ 「関門地域」で行ったことがある観光資源等

下関市または北九州市へ「行ったことがある」回答者に加え、「住んでいたことがある」とした回答者も対象に(計 n=704)、「関門地域の観光資源で、行ったことがある場所をすべて選んでください。」として尋ねた結果を 2016 調査と比較したものを図 9 に示す。

全体的な傾向としては 2016 調査と 2024 調査で際立った変化は見られない。下関市においては「角島周辺」の回答が増えていることが目立つ。これは、角島周辺がいわゆる「インスタ映え」するスポットとして知名度が高まったことが要因として考えられる。北九州市においては回答率に大きな変化はないが、「平尾台・鍾乳洞」と「皿倉山」において増加が見られる。これは、アウトドア志向の高まりや、皿倉山の夜景スポットとしての知名度向上が要因として考えられる。

一方、関門地域の観光の核とも言える下関市の唐戸地区周辺の諸資源や、北九州市の「門司港レトロ地区の歴史的建造物」はじめ門司港地区、また両市に跨る「関門人道トンネル」については、訪れたことがある回答者自体は多いものの、概ね横這い傾向にある。2016 調査以降、2017 年には唐戸・門司港エリアを中心とした「関門“ノスタルジック”海峡～時の停車場、近代化の記憶～」が日本遺産認定ストーリーになる等、様々な取り組みが行われてきているものの、それが現時点では目立った形で観光客の誘客増には結び付いていない可能性がある。しかし(3)①で述べるように観光したい意欲は高まっており、これまでの情報発信等の取組には一定の効果があり、今後の更なる取組が期待されると考えられる。

なお、選択肢の中で訪問者が 2 番目に多い北九州市の「スペースワールド」は 2017 年末に閉園した。他都市居住者等の 3 割強もの人が訪れたことがあると回答した観光資源を喪失したことで大きな影響が生じたことをうかがわせる。一方、その跡地には大型アウトレットモールが整備され、当該エリアでは東田ミュージアムパークに関する取り組みも進められ、また近接する皿倉山は北九州市が日本新三大夜景都市ランキング 1 位となるに際して重要な役割を果たし観光資源としての魅力向上に向けた取り組みも行われている等、八幡東区におけるスペースワールド閉園後の観光振興については進展が見られる。本アンケートにおいても「いのちのたび博物館・環境ミュージアム・科学館」や「皿倉山」については増加傾向となっており、今後も継続した取り組みにより誘客増が期待できよう。



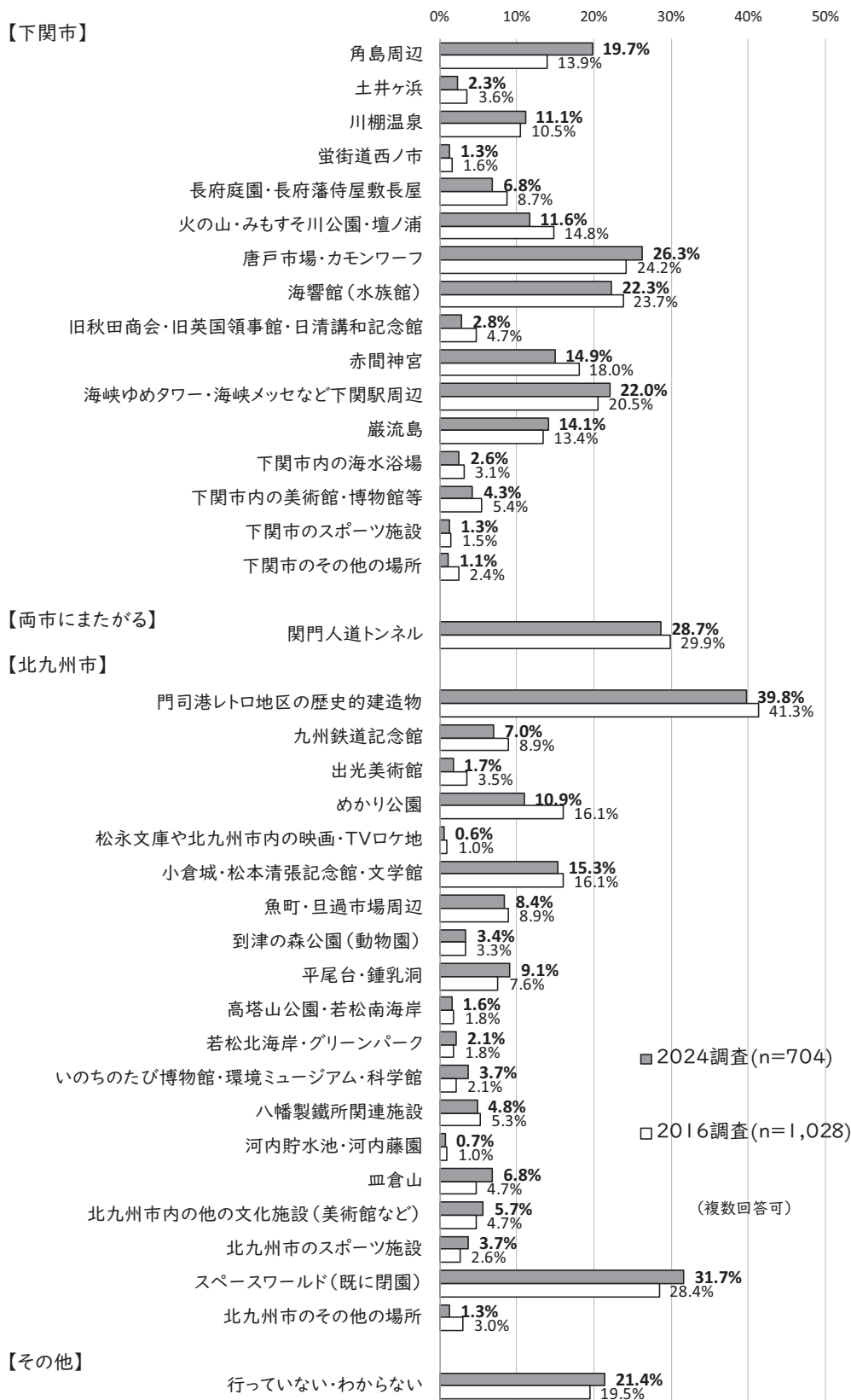


図9 「関門地域」で行ったことがある観光資源等

### (3) 関門地域への観光等による訪問の意向等

#### ① 「関門地域」で今後行ってみたい観光資源等

(2) ⑤の選択肢と概ね同じ選択肢（スペースワールド除く）を用い、全回答者を対象に、「関門地域の観光資源で、今後行ってみたい場所をすべて選んでください。」として尋ねた結果を 2016 調査と比較したものを図 10 に示す。

2024 調査で最も多いのは「巖流島」の 34.0%、次いで「関門人道トンネル」30.9%、「門司港レトロ地区の歴史的建造物」30.3% であり、この 3 つが特に回答が多い結果となっており、また、いずれも 2016 調査より大幅に回答率が高まっている。これらの観光資源については(2) ⑤の結果で訪問経験のある回答率は伸び悩んでいるものの、今後に向けたニーズは大きく高まっていると言え、今後の観光振興の取り組み次第では、大きく観光客数が増える可能性があると考えられる。

その他の観光資源についてみると、下関市では「角島」、「川棚温泉」、「海響館」など、市内全域にわたり訪問意欲が伸びている観光資源がある。北九州市では「平尾台・鍾乳洞」、「皿倉山」が大幅に伸びており、自然資源への関心が高まっていると言えよう。

関門地域には豊かな歴史的な観光資源や自然資源、文化資源、各種施設等があり、いずれも今後、工夫次第で観光先として関心が高まる可能性を有していると言えよう。

#### ② 日本遺産制度の認知度

関門地域における 2016 年以降の観光関連の変化として、文化庁が認定する日本遺産について、2017 年に下関市と北九州市が共同申請した「関門“ノスタルジック”海峡～時の停車場、近代化の記憶～」が認定されたことが挙げられる。この点について 2024 調査において新たな質問として尋ねることとした。設問に際しては南（2019）を参考とした。

まず、日本遺産制度そのものの認知度を把握するため、「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定する「日本遺産」の制度をご存知ですか。」と尋ねた結果を図 11 に示す。

「知っている」人は全回答者の 26.8% となっており、居住市別では大きな差はないが、年齢別にみると 30 代、40 代で認知度が低く、70 代以上で高くなっている。

#### ③ 日本遺産「関門“ノスタルジック”海峡」の認知度

次に、関門地域に関連する問として、「下関市と北九州市にある 42 の文化財で構成される「関門“ノスタルジック”海峡 ～時の停車場、近代化の記憶」というストーリーが、2017 年に日本遺産に認定されました。そのことをご存知ですか。」と尋ねた結果を図 12 に示す。

「知っている」人は全回答者の 5.6% となっており、居住市別では広島市、熊本市においては 8～9% 程度となっているが、全体的に認知度は高いとは言えない。関門地域の観光資源として、(3) ①の結果にあるように「門司港レトロ地区の歴史的建造物」や下関市の唐戸地区の資源には訪問ニーズがあることから、日本遺産のストーリーを活かした事業展開により、より一層、魅力的な観光地となり、さらなる誘客に繋げることが期待される。

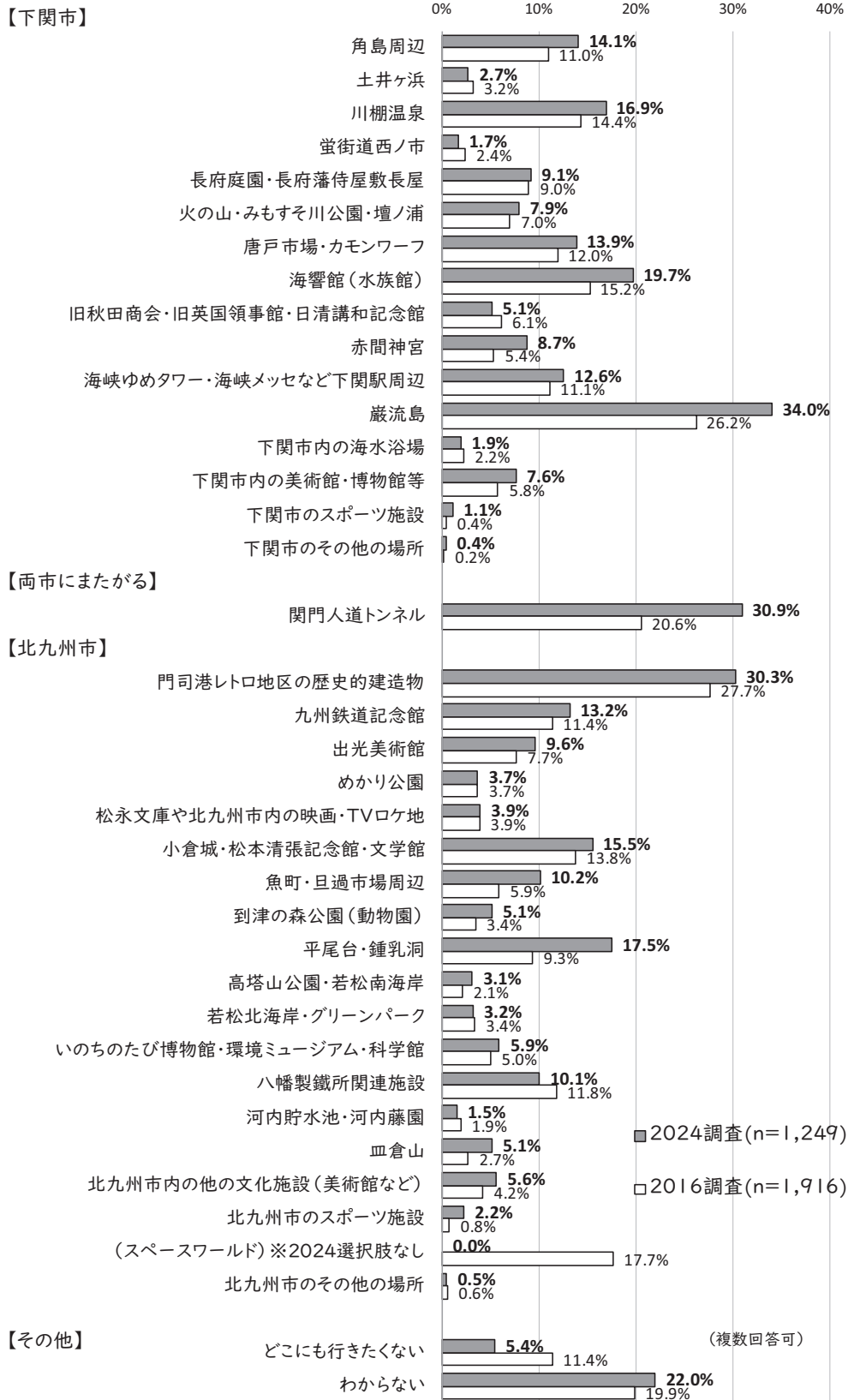


図 10 「関門地域」で今後行ってみたい観光資源等

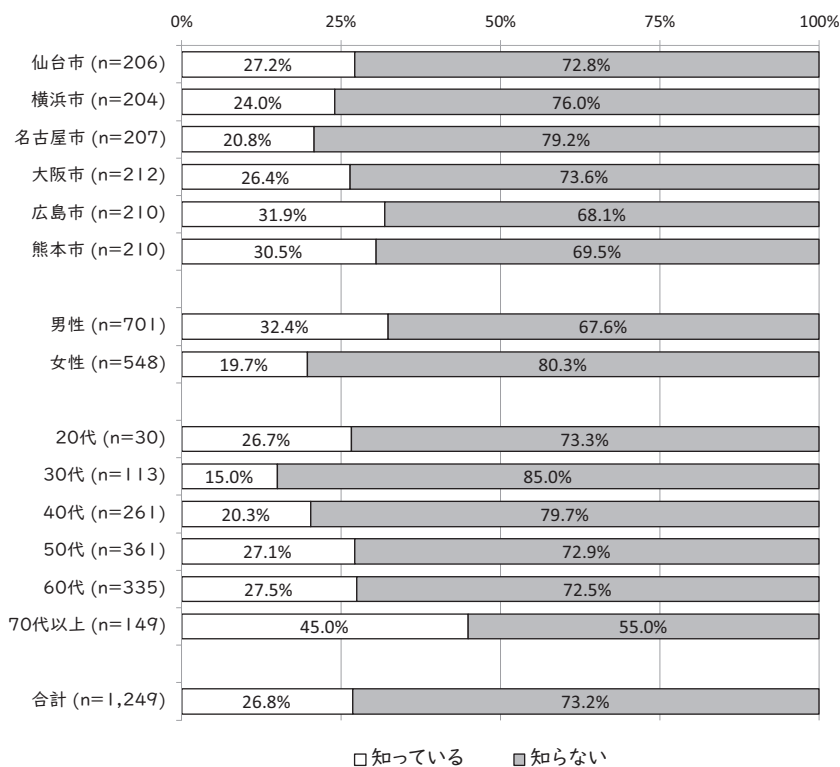


図 11 日本遺産制度の認知度

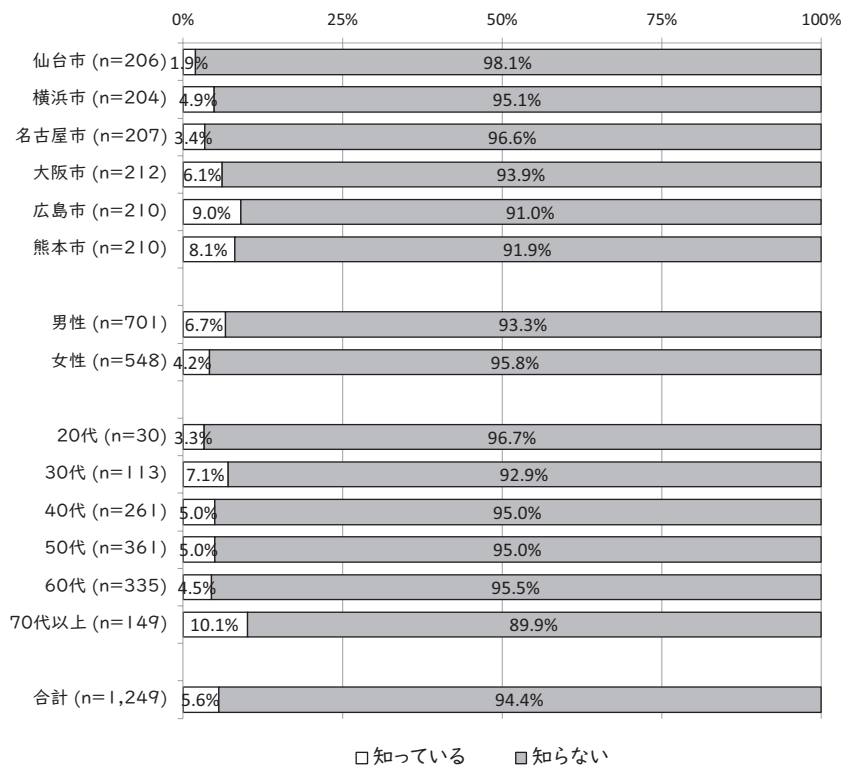


図 12 日本遺産「関門“ノスタルジック”海峡」の認知度

#### ④ 今後の「関門地域」への観光での訪問意向

全回答者を対象に、「今後、関門地域（下関市、北九州市）に観光で行ってみたいと思いますか。」と尋ねた結果を図13に示す。本設問については、2016調査においても同様の問を設けている。

各属性とも、「ぜひ行ってみたい」および「行ってみてもよい」という肯定的な回答が60%程度となっており、関門地域の観光地としての魅力は、広く認められており、きっかけがあれば実際に観光に来ていただける可能性が高いことをうかがわせる。また、2016年調査よりも肯定的な回答が増加して否定的な回答が減少しており、この8年間に関門地域の観光地としての好印象が高まった可能性がある。今後も引き続き、観光地としての魅力向上や情報発信、訪問のきっかけづくり等に取り組んでいくことが求められる。

属性別にみると、居住市別では地理的に近い都市において訪問意向が高く、性別では大きな差はなく、年齢別では若い世代の方が訪問意向が高い傾向がある。若い世代の訪問意向が高いことは、今後の観光振興を展望するうえで大きな好材料と言えよう。

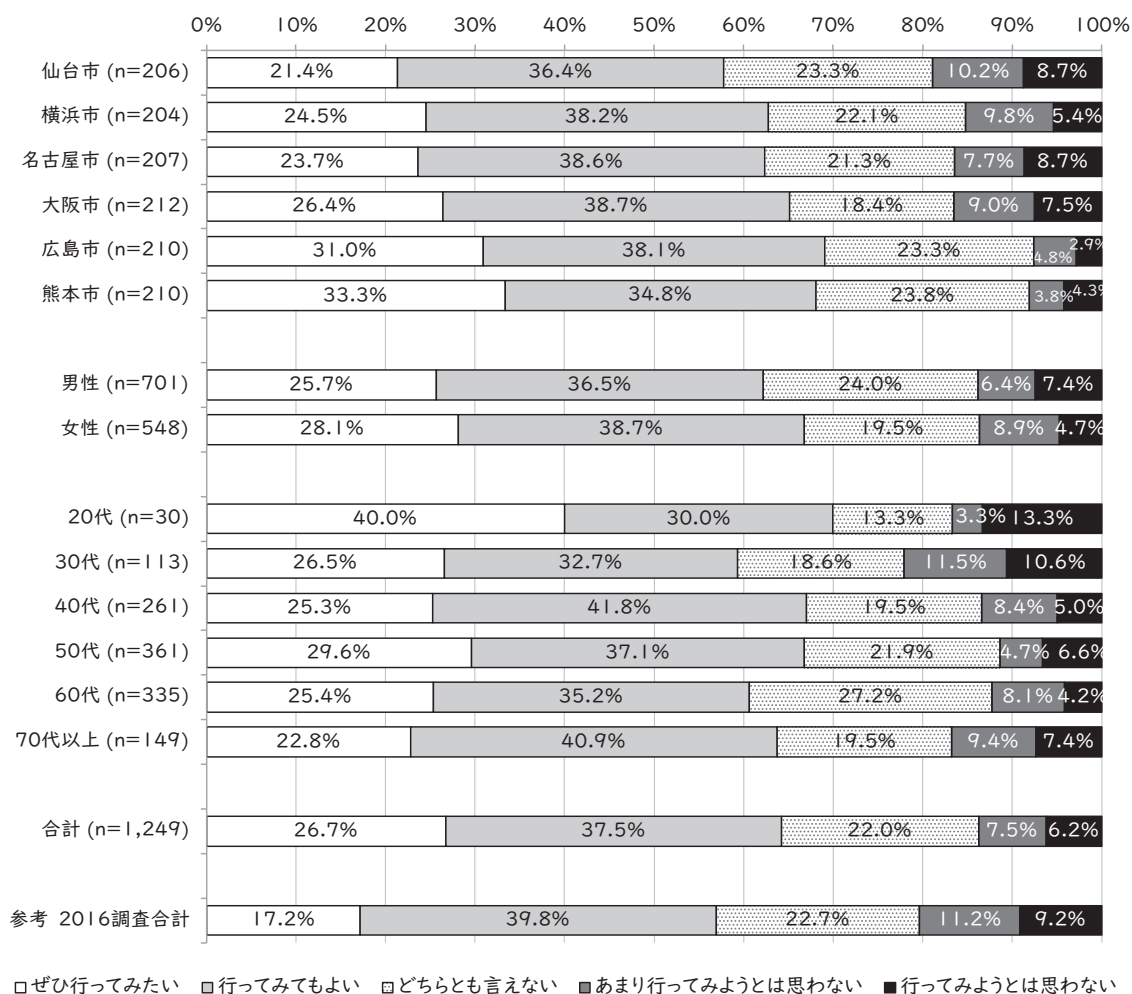


図13 今後の「関門地域」への観光での訪問意向

### ⑤ 「関門地域」へ観光で行ってみようと思わない理由

(3) ④において、「あまり行ってみようとは思わない」および「行ってみようとは思わない」とした回答者は比較的少数（13.8%）だが、この172サンプルを対象に、「関門地域に観光で行ってみようと思わない理由は何ですか。主な意見を2つまで回答してください。」として尋ねた結果について、2016調査と比較したものを図14に示す。

2024調査で最も多いのは「なんとなく／特に理由はない」の33.7%、次いで「旅行にかかる費用が高い」26.7%、「行くキッカケがない」21.5%となっている。「なんとなく／特に理由はない」や「行くキッカケがない」とする回答者については、効果的な観光PR活動や旅行促進活動が行われれば、訪問に繋がっていきやすい人々と考えられる。一方、旅行費用に関しては、両市による対応では基本的に解決することは難しいが、何らかの補助を検討していくことは選択肢として考えられよう。

なお、強い否定意見と言える「観光地として魅力がない」は10.5%、「訪問先として良いイメージがない」は4.1%であり、比較的少ない。また「観光地として魅力がない」とする意見は2016調査よりも大幅に減少している。関門地域の観光を強く否定する意見が多くないことは、関門地域の観光を考えていくうえで好材料と言えよう。

なお、2016調査では「なんとなく」としていた選択肢を、2024調査では「なんとなく／特に理由はない」に表現を修正しており、これが当該選択肢の回答率を高めた可能性がある点は留意が必要である。

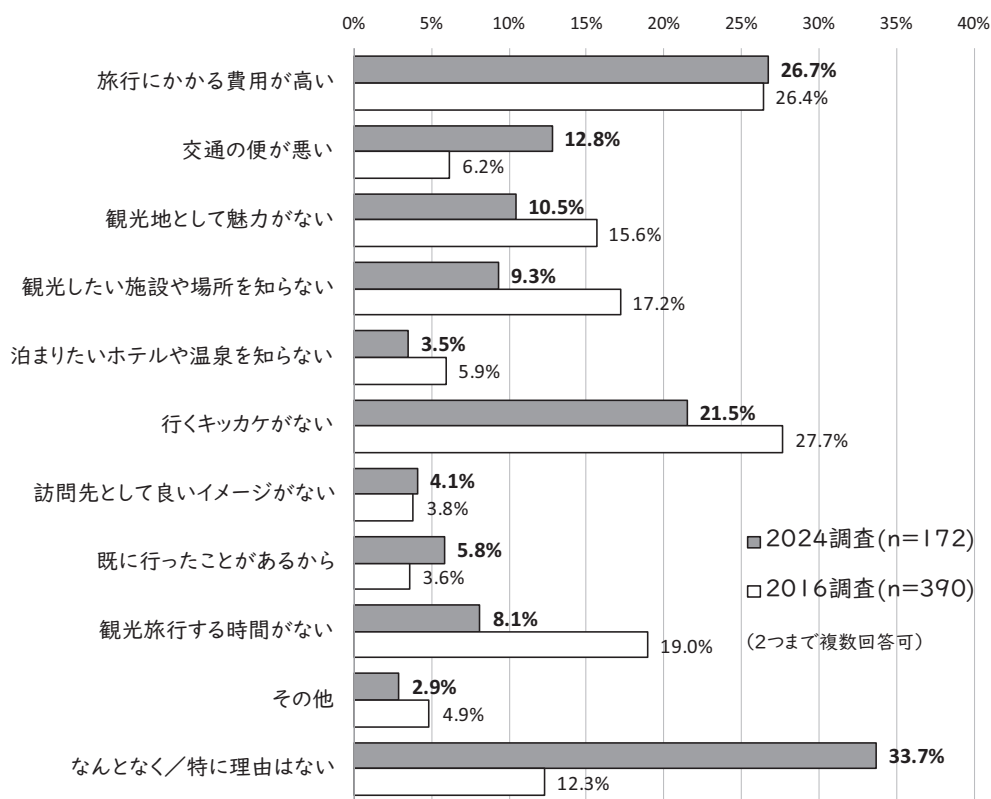


図14 「関門地域」へ観光で行ってみようと思わない理由

### ⑥ 「関門地域」両市への同時訪問意向

全回答者に対し、「北九州市の中心部と下関市の中心部の間は、関門海峡を挟んでいますが、非常に近い距離にあります。仮に北九州市に観光や仕事で行った際、下関市までついでに行ってみようと思いませんか。あるいは下関市に行った場合、北九州市までついでに行ってみようと思いませんか。」と尋ねた結果をまとめたものを図 15 に示す。なお、設問文において、距離の近さについて「電車で約 15 分（小倉駅～下関駅）、船（門司港～唐戸）で約 5 分、徒歩（関門人道トンネル）で約 15 分」との注釈をつけた。

「ぜひ行ってみたい」および「行ってみてもよい」とする肯定的回答が 60.6% であり、属性別にみても概ね同様の傾向となっている。また、2016 調査ともほぼ同じ結果となっている。一方で、(3)④の訪問意向の結果と比較すると、両市の中心部の距離が近いことを改めて提示した設問においても、訪問意向には影響は見られない。これは、(3)④の回答段階で多くの回答者が北九州市と下関市の中心部の近接性を理解しているためと考えられる。

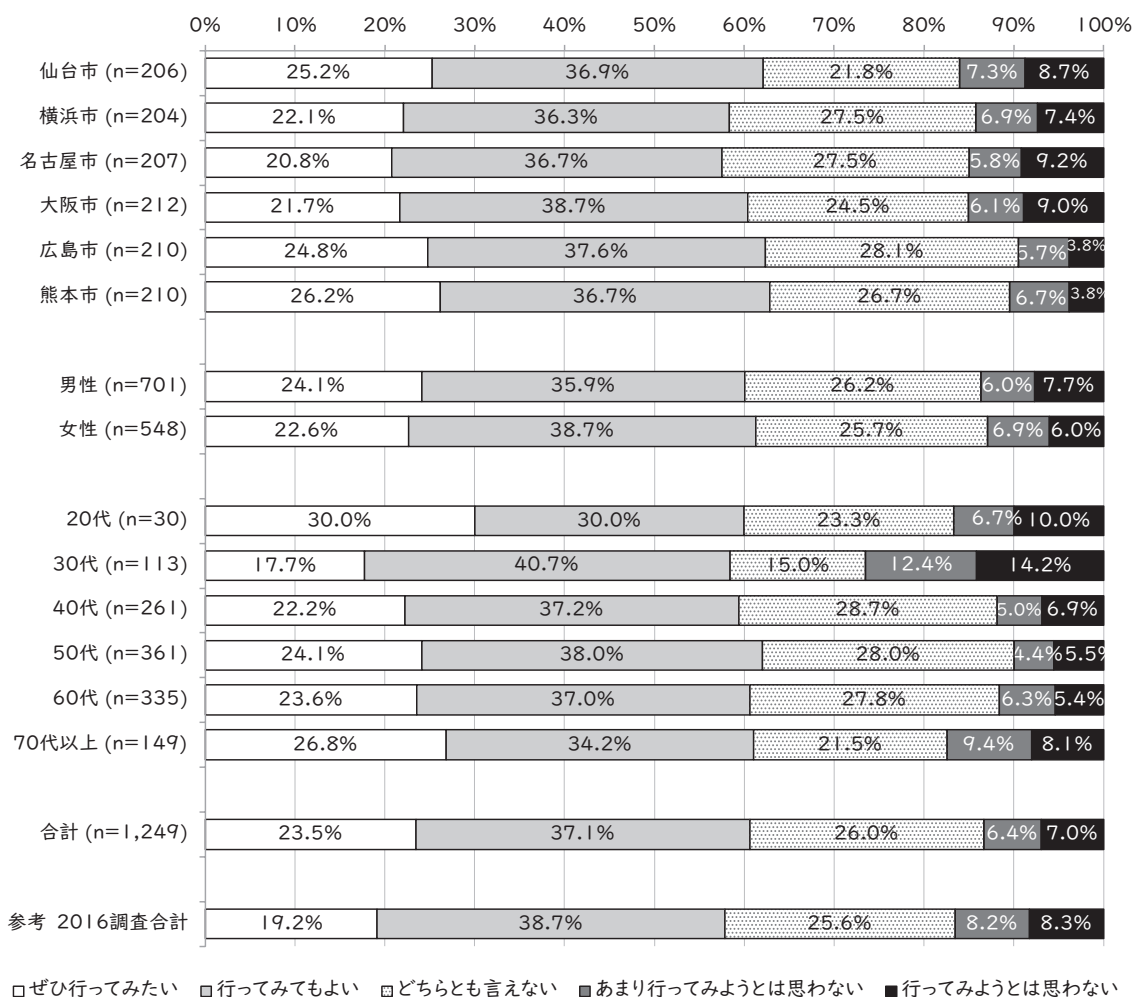


図 15 「関門地域」構成の両市への同時訪問意向

#### (4) 関門地域に対するイメージ

関門地域に対する域外住民のイメージを把握する観点から、全回答者に対し、「それぞれの言葉(形容詞)について、関門地域のイメージに当てはまるものをお答えください。」として、15組の対になる形容詞を提示し、5段階でどちらの言葉にイメージが近いか回答を求めた。そのうえで、ポジティブなイメージに最も近い点数を1点、ネガティブなイメージに最も近い点数を5点とし、回答の平均点を求めた。その結果について、2024調査と2016調査を比較したものを図16に示す。なお図化に際しては、対になる形容詞ごとの平均点について2024調査の平均点が小さい(=ポジティブなイメージが強い)順に並び替えている。

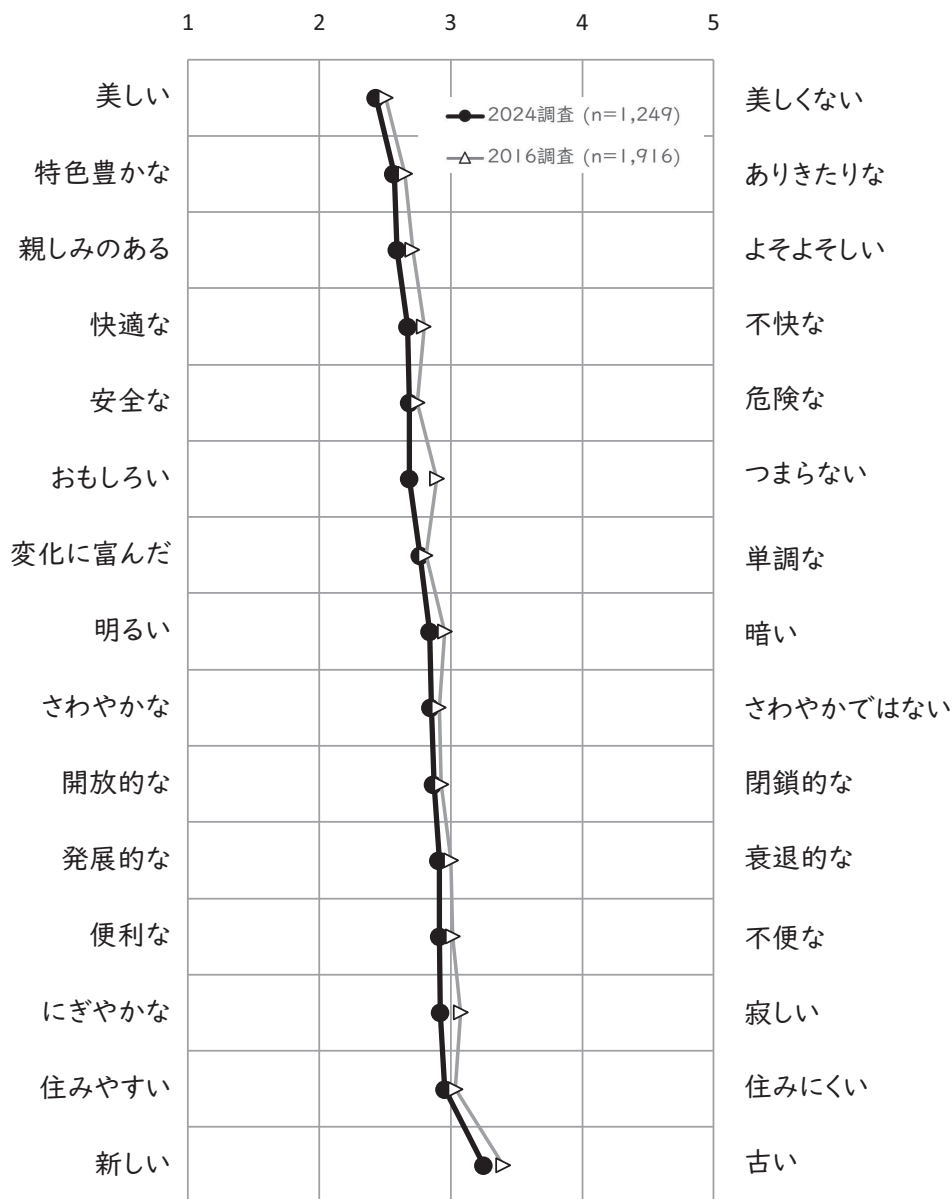


図16 「関門地域」に対するイメージ



上位5つの形容詞をみると、「美しい」、「特色豊かな」、「親しみのある」、「快適な」、「安全な」となっており、これらのイメージを域外住民が持っていることは、観光振興に際してプラス材料ととらえることができる。一方、下位5つの形容詞は、「古い」、「住みにくい」、「寂しい」、「不便な」、「衰退的な」となっている。

2024 調査と 2016 調査は概ね似た傾向となっているが、全体的に肯定的な言葉のスコアが高くなっており、関門地域のイメージが近年向上してきている可能性が指摘できる。特に、「おもしろい」と「つまらない」の対について、「おもしろい」の方が強まっている点は特筆できる。こうしたイメージに応えるような観光振興が求められると言えよう。南(2016)では「ポジティブなイメージを伸ばし、一方でネガティブなイメージについてはそれを払しょくするか、あるいは逆手にとって好転させるといった、対外的な都市イメージの PR 戦略と併せて実施していくことにより、地域の知名度向上や観光資源の広報に繋が」ることを指摘しており、今後もこうした視点が必要と考える。

#### (5) 北九州市の観光資源整備の方向性

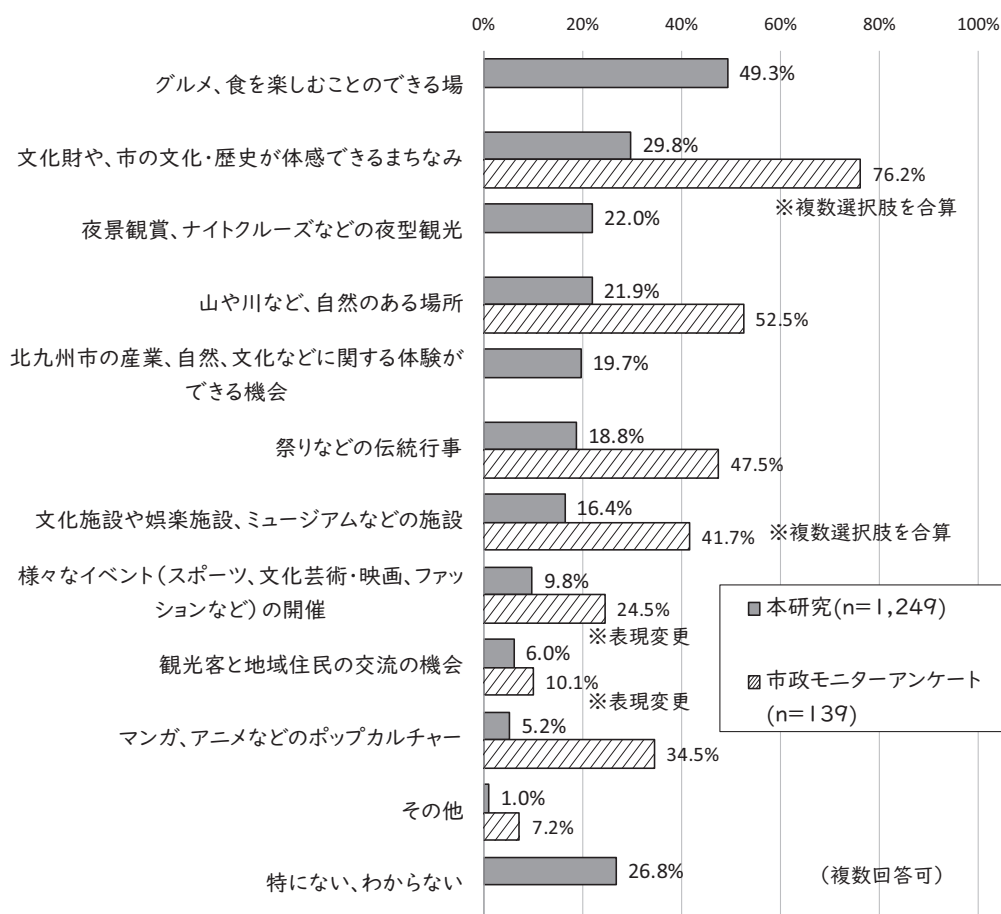
アンケート調査の最後の設問として、関門地域全体ではなく北九州市に絞る形で、「北九州市の観光資源の整備について、今後、何を充実させていくべきだと思いますか。北九州市のことをよくご存じない方は、イメージでお答えください。(複数回答可)」を尋ねた。これは、北九州市が2023年に市政モニター（北九州市内在住の18歳以上の市民から公募）を対象として実施した令和5年度第2回市政モニターアンケート「北九州市の観光振興について」の結果と比較することにより、市民の考えと、域外住民の考えの相違点等を把握する目的の設問である。ただし、本調査の実施に際しては、域外住民の回答しやすさを考慮するとともに、北九州市の観光資源をより詳しく挙げる観点から、一部の選択肢の統合・追加を行った。本研究における調査結果と市政モニターアンケート調査との比較を図17に示す。

まず、本研究における調査結果について、最も多いのは「グルメ、食を楽しむことのできる場」の49.3%であり、突出して多くなっている。北九州市の観光において、食の充実が特に重視されていると言えよう。次いで、「文化財や、市の文化・歴史が体感できるまちなみ」が29.8%と多くなっている。文化財観光や文化体験のできる機会の充実について、引き続きニーズがあると言えよう。

次いで、20%前後で「夜景観賞、ナイトクルーズなどの夜型観光」、「山や川など、自然のある場所」、「北九州市の産業、自然、文化などに関する体験ができる機会」、「祭りなどの伝統行事」が並んでいる。北九州市の多様な観光資源について、それぞれ一定の整備ニーズがあると言えよう。

一方、北九州市の実施した令和5年度第2回市政モニターアンケート「北九州市の観光振興について」の結果では、文化財・市の文化や歴史が体感できるまちなみ関連の選択肢(3つの選択肢に分かれていたものを本研究では合算)が突出して多くなっている。次いで「山や川など、自然のある場所」、「祭りなどの伝統行事」などが多くなっている。市政モニターアンケートには選択肢がなく本研究において追加した選択肢があることもあり、単純な

比較はできないが、概ね、共通する選択肢については、市外住民と北九州市民の「観光資源整備の方向性」として重視すべき事項の順位は類似している傾向が見られる。一方、「マンガ、アニメなどのポップカルチャー」については、市政モニターにおいてはある程度高い回答率となっているが、域外住民による回答率は低い。これは、ポップカルチャーが観光資源として一般的には認識されていない可能性があること、および北九州市がポップカルチャーをいかしたまちづくりに力を入れていることが市外住民には十分認識されていないことが理由として考えられる。後者については、市外への積極的な情報発信が必要と言えよう。



注①：本研究で「文化財や、市の文化・歴史が体感できるまちなみ」としている選択肢は、市政モニターアンケートでは「世界遺産をはじめとする文化財」「市の文化・歴史が体感できるまちなみ」および「伝統産業、伝統文化」の3つの選択肢に分かれており、本図においては市政モニターアンケートの3選択肢を単純合算して示している。

注②：本研究で「文化施設や娯楽施設、ミュージアムなどの施設」としている選択肢は、市政モニターアンケートでは「新しい文化施設や娯楽施設」および「博物館や美術館などの展示施設」の2つの選択肢に分かれており、本図においては市政モニターアンケートの2選択肢を単純合算して示している。

注③：本研究で「様々なイベント(スポーツ、文化芸術・映画、ファッションなど)の開催」としている選択肢は、市政モニターアンケートでは「新しいイベントの開催」という表現。

注④：本研究で「観光客と地域住民の交流の機会」としている選択肢は、市政モニターアンケートでは「市民との交流・ふれあい」という表現。

図 17 北九州市の観光資源整備の方向性（市政モニターアンケート調査との比較）

#### 4. おわりに

本研究においては国内他都市の一般市民の関門地域の観光に対する認識を把握するとともに、その結果を約8年前の2016年1月に関門地域共同研究で実施した調査結果と比較することにより、関門地域における観光政策を評価・検討するに際しての基礎資料を得ることを目的とし、国内6都市（仙台市、横浜市、名古屋市、大阪市、広島市、熊本市）の市民に対するアンケート調査を実施して結果をとりまとめた。

2016年と比較すると、コロナ禍の期間を挟んだものの、域外住民の関門地域の観光に関する認識等には大きな変化は見られなかった。一方で、今後の「関門地域」への観光での訪問意向については2016調査より2024調査の方が肯定的な回答が増えている等、観光による地域活性化に向けた明るい兆しがあることが明らかとなった。

こうした域外住民の意識については、経年変化を把握することで、関門地域の置かれている状況の変化の把握や、観光振興に関する取り組みの客観的評価につながる一材料になることが考えられる。観光振興の成果が出るには一定の期間を要することから、今後も関門地域共同研究において域外住民に対する意識調査を実施していくことを検討していきたい。そして、考察した結果を地域に還元し、観光政策の推進に寄与していくことを今後の課題としたい。

#### 参考文献

- ・北九州市（2023）「北九州市観光動態調査（令和4年次）」
- ・北九州市（2023）「北九州市観光振興プラン」
- ・北九州市（2023）「令和5年度第2回市政モニターアンケート「北九州市の観光振興について」」
- ・下関市（2023）「令和4年の下関市観光客数・宿泊客数について」
- ・下関市（2021）「下関市観光施設事業経営戦略」
- ・下関市（2023）「火の山地区観光施設再編整備基本計画」
- ・下関市（2023）「あるかぼーと・唐戸エリアマスタープラン」
- ・国土交通省中国運輸局（2023）「関門海峡 光の架け橋メガトリップエリア構築事業実施にあたっての実現可能性調査 検討結果」
- ・南博（2016）「関門地域の観光の現状と課題ー地域外住民からの意識に着目してー」、関門地域共同研究会『関門地域研究』Vol.25、pp. 63-89
- ・南博（2019）「日本遺産「関門“ノスタルジック”海峡」認定後2年間の現状分析」、関門地域共同研究会『関門地域研究』Vol.28、pp. 11-60